資料展示「赤レンガの医学資料館」

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部　助教　久保田　明　子

放射線災害・医科学研究拠点に多大なご理解を賜り共催していただいた、2021 年度の資料展示「赤レンガの医学資料館：陸軍兵器補給廠だった医学資料館で見る広島とヒロシマの医学史」について報告する。

1．広島大学医学部での広島３景：「芸備医事」「軍都広島」「被爆地の大学医学部」

放射線災害・医科学研究拠点のご協力を頂くことと筆者の所属を考えれば、資料展示のテーマは、例年実施している通り「原爆（放射線災害）の医学」をベースとすべきところだが、今回は、医学部（医学資料館）の状況とご配慮によって、今までの研修室内での展示ではなく、医学資料館のメインの広い展示スペース全体を使わせていただくこととなったため、方針を少し変更することとし、医学資料館を中心に据えた展示を試みようと考えた。また、この申し出は、嬉しくも悲鳴をあげることとなった。階段をのぼらずに、お客様がゆったりと見学ができる第一展示室で、立派な展示用ケースが充実している空間で、資料の状態にあまり不安なく展示ができる状況は大変にありがたかった。その一方、展示スペースが単純にいつもの４倍以上となること、すでに展示している資料の一部が動かせず、展示をそのままの状態にしておく必要があることは、展示構成や展示資料の物量を検討するときに大きく悩むこととなった。そういう状況もあって、今回は、この医学資料館そのものをベースに、いつもより視野を広げて、対象の枠組みを拡大した。結果、原爆といった特性は相対的には薄まることとなったが、一方で、広島大学医学部のルーツともいえる江戸時代から隆盛した広島の医学界、近代の広島の地域（ローカル）の特性を見直し、そのうえで原爆の医学がどう発展していったのか、といった、コンテキストを意識する展示ができたと考える。今までは、1945 年８月６日およびそれ以降、といった、ある意味、原爆という横軸での展示となったが、今回は昔からの時間経過を意識した縦軸の展示というイメージである。それをまた３つのキーワードで集約すれば、「芸備医事」、「軍都広島」、「被爆地の大学医学部」である。

1-1．芸備医事

『芸備医事』とは現在広島医学会より刊行されている『広島医学』の前身雑誌である。この医学雑誌は、日清戦争終了間もない 1896（明治 29）年に創刊され（このことは現在の『広島医学』の表紙上部にも書かれている）、以後 1942（昭和 17）年まで継続刊行されたが戦争期に中断された。戦後の 1948（昭和 23）年に復活するが、その際、誌名が『広島医学』と改名された。これは、広島地域の医学発展のために刊行された雑誌だが、医学技術や研究を発信する地域に根差した雑誌が古く明治時代から存在している（そしてそれが続いている）、という事例は、まずそれほど例がないことである。

こういった専門誌が刊行できるということは、広島が、まず医学に熱心な地域でなければ不可能なことであるうえ、医学者・医師同士のコミュニケーションが活発でなければならない。それを裏付けるかのように、雑誌創刊の直前期、広島市の

医師会、広島県医師会、地域の医師の研究会であった広島医学会などが次々と結成されている。

また、初期の雑誌を見ると、その当時の症例報告や医療技術、医学研究の発信ばかりでなく、広島の医学史（江戸時代以降の広島の医学者の紹介）などにも心血を注いでいる。『芸備医事』第１巻第１号の冒頭の論文は、東京帝国大学教授で日本の精神医学の父である呉秀三の著作であるが（彼は広島に由来があり、現在でも広島で大変尊敬を集めている／医学資料館に胸像がある）、そのテーマは、広島の江戸時代の有名な漢方医であった吉益東洞であった。つまり、当代随一の精神医学の研究者が、先人について尊敬の念をもって、大事な学術雑誌創刊号の最初の論文を掲げたのである。この一事をもってしても、広島という地域の医学の在り方の特性が見えよう。明治中期以降、広島には医師を輩出するための医学校がなくなっていたが、決して医学不毛の地ではなかったのである。

当然これらは原爆投下以前のことであり、被爆の問題と直接関係はない。しかしながら、原爆のあの日を迎える前にすでにこういった医師たちのスピリッツ、医学者・医師たちのコミュニティがあったことは、莫大な数の原爆被災者たちの医療を当初から担った彼らの精力的な活動の意義に、深い意味を更に与える。そしてこれはまた、未来に起こり得る放射線災害時の緊急被ばく医療の在り方にも考え方は通じるのではないであろうか。

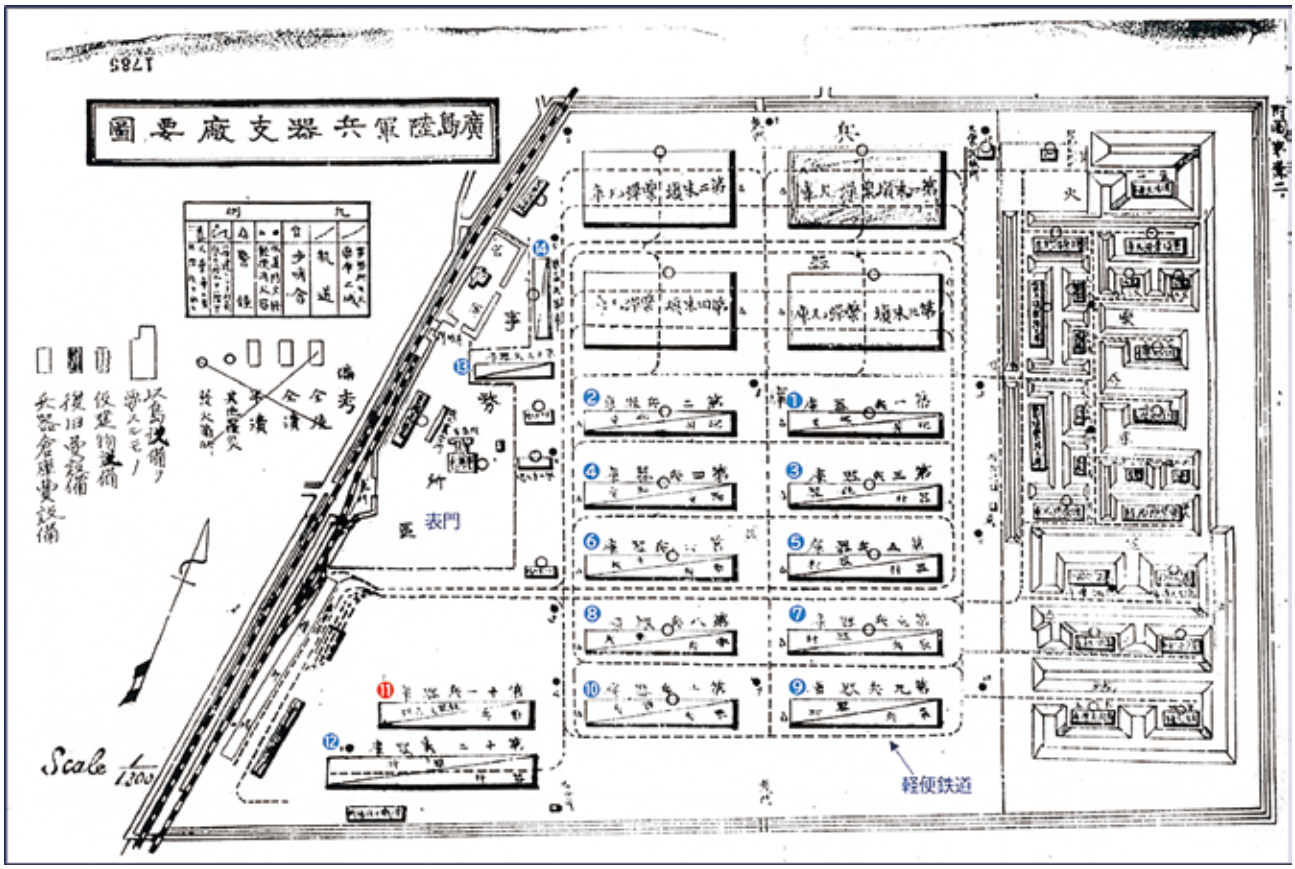
1-2. 軍都広島

広島県内では、海軍の重要拠点として呉市の軍港が著名であるが、広島市もまた、宇品港を抱える陸軍の重要な拠点となった。例えば、近代日本の最初の対外戦争となった日清戦争の軍はほぼすべて宇品港から出発し、そして帰ってくるのも（負傷者も、死没者の遺骨なども）また宇品であった。そのために人口も増え、経済も発展したが、一方で医師不足の問題も起こった。ただ、前述のように、地域の医師たちの活動は活発であり、また軍都にやってくる軍医たちと地元の医師との交流も盛んであったため、広島の医師たちは最新の医学研究や軍陣医学の技術に触れることができた。また、軍施設がいくつか建てられたが、その一つに弾薬などを整備・生産する施設であった陸軍兵器補給廠があった。この敷地跡の多くが現在広島大学医学部となる。

敗戦までここでは弾薬などを作っており、原爆投下の日も、修道中学などの生徒たちがここで動員されて作業をしていて被爆した。例えば、著名な画家である平山郁夫は、ここで被爆している。更に、焼け残った赤レンガには臨時救護所も置かれ、多くの傷ついた被災者が集まった。つまり、現在の医学部および原医研が立つ地には、そういった由来があるのである。

戦後、広島市内の現在の霞キャンパスに医学部と大学病院が疎開先から移転したとき（1957 年）はまだ、この兵器補給廠であった「赤レンガ」の建物ばかりであり、1961 年に設立された原爆放射線医科学研究所（原医研）も、当初は、この大正時代に作られた古い（使いづらい）赤レンガの建物であったという。当然、取り壊しが望まれ、次々と新しい建物が作られたが、最後の１つになったときに同窓会（広仁会、福原照明会長）などが保存を訴えて残ることとなった。それが、現在の医学資料館の赤レンガである（11 号館）。

前述と同様、赤レンガの建物と原爆は無関係ではあるが、それでも、昔、人を傷つけ殺すための道具を生産していた場所が、原爆の際は救護所となり、現在は人の命を救うための場所になっている、というその歴史的経緯を、ふと思うことがあってもよいのではないだろうか。



出典：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C03011542200 広島兵器支廠火工作業場設備の件（防衛省防衛研究所）をもとに作成

1-3. 被爆地の大学医学部

被爆の有無に関係なく、各地に病院は必要であり、それが大学医学部や大学病院であれば、社会の期待は大きい。ただ、広島（と長崎）は、そのうえに被爆の問題が大変大きくのしかかる。更に広島の場合、現在の医学部の前身校は 1945 年 8 月 5 日に開校したために当初より大きなダメージを受け、疎開を余儀なくされたため、広島市での多くの被爆者の対応には時間がかかった。その間ももちろん医学部や大学病院は尽力を続けたが、1957 年に現在のキャンパスで復活した際の被爆医療への期待は、長期の治療と研究が必要となる放射線災害の人体影響の特性もあって、やはり相当大きかったと想像される。そしてほどなく原医研も設立された。そういった設立事情を持ち、芸備医事（広島医学）に象徴されるような地元の医師たちの活動および成果と軍都時代に得た軍隊での医療制度や技術などの知見を背景にし、且つ、戦後の新しい学問発展の潮流の中で、医学部・大学病院および原医研は活動をし、現在もその源流の性格を保持しつつ研究を発展させていると考える。

2．資料展示「赤レンガの医学資料館」

2-1. 展示企画

すでに述べたように、展示会場がこれまでの 2 階の研修室内から 1 階の広いメインの展示室となったことで、これまでの運営とは大きく異なる方法を検討する必要があった。例えば、展示ケースの数がかなり増えたこと、文章を掲載するパネルの展示スペースがほぼないことなどは、これまでの考え方を大きく変える必要があった。

また、固定されている展示資料をあまり不自然でない形で展示経路に組み込むことを考えることは非常に難しかった。個人的には、普段は原爆を中心に研究調査しているため、それ以外の分野についての調査研究を行うことは時間的にも限界があった。

ただ、準備のなかで、既に上げた３景だけでなく重視したいことも出てきた。それは、医学部の医学資料館の意義である。

2022 年現在、国内各地の大学の医学系の学部による医学資料館は比較的多く存在するが、広島大学の医学部医学資料館は、日本最初の国立大学の館であった。設立の際は、他大学の医学部に非常にうらやましがられたとも聞く。医の先達を尊び、医学の歴史を意識し、自身の組織（研究機関）の医学研究を知らしめる館を日本で最初に示した広島大学医学部の志は高い評価を得るものである。そして現在それをまた大々的に環境整備を実施し、リニューアルを実施する、という、広島の医学の矜持を保つプロジェクトを実行している、ということを少しでも知らしめたいという希望を持った。と同時に、これまで医学資料館の運営や展示に心血を注がれてきた歴代の学長、教授、館長の尽力も発信したいと思った。そこで、タイトルには医学資料館の存在を前面に出すこととした。

2-2. 展示構成

展示は、以下の４つのテーマで構成した。

A　赤レンガの変遷：
兵器補給廠から医学資料館へ

B　広島大学医学部：
1945 年８月５日に生まれて

C　医学の広島：広島の医学の歴史とその継承

D　広島の医学：広島という地域の医学の様相

以下、それらについて、簡単に説明する。

A　赤レンガの変遷：兵器補給廠から医学資料館へ

主に建物の変遷を中心に、写真パネルを多用して構成した。広島市公文書館所蔵の珍しい兵器補給廠時代の写真（当時、軍施設の写真を撮ることは難しかった）、広島大学文書館所蔵の 1957 年当時の広島大学医学部キャンパスの航空写真などを活用したほか、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門のご協力を得て、霞キャンパスから出土した防衛食容器（軍用の保存食容器、金属の代わりに陶磁器で作られた缶詰の代用品。湯呑ぐらいの大きさで煮豆などを入れた）を展示した。

写真や防衛食容器は、なかなか見られる機会のないものである。特に大学の文書館、博物館の所蔵資料は普段は東広島キャンパスにあるため、被爆の現場であった広島市でほぼ目に触れることはない。その点で、来館者に喜ばれたようであった。

B　広島大学医学部：1945 年８月５日に生まれて

医学資料館に多く残る、広島大学医学部前身校の関連文書などを多く展示した。また、戦後の医学部の学生たちの活動の一端を紹介した。例えば医学部学生有志による医学資料展示の活動や勉強会の様子、また大変大きかった学生運動の資料も展示した。多くの大学での学生運動は大体医学部から発生しているが、広島大学もそうであった。ただ、広大医学部のそれは、単に理想や主義を主張し過激な行動をするのではなく、例えば「差額ベッドの禁止」の要求を行うなど具体的な提案などをしていることも資料から読み取れた。今後、学生運動研究は一つの分野を形成するが、広大のそれを研究するに一級資料となるものである。なお、この資料群は、学生運動を制圧する側の学部の職員によって収集されたという由来もあり、その点でもユニークな資料となっている。

また、広大医学部の医学研究の重要な例として、大久野島の毒ガスの問題に関する第二内科の研究資料も展示した。大久野島の毒ガスの問題は近年知られてきているが、そこに、広大医学部の研究があることはあまり知られていないらしく、来館者の多くの方が印象的だとの感想をくださった。調査研究自体は完了しているため、こうやって医学資料館で発信していくことが今後も有効であると考える。

C　医学の広島：広島の医学の歴史とその継承

江戸時代に精巧な人骨模型が広島で製作された。製作者・星野良悦の名前を取って「星野木骨」と言われるが、この広島大学所蔵の木骨は、現在、国の重要文化財に指定されている。原本の展示はかなわないが、その精巧なレプリカと全身等身大写真などを継続して展示し、キャプションなどを改めた。こういった江戸時代の漢方医の成果を、広大医学部の教授は把握し、文化財指定としたことは大変重要なことである。単に木骨を眺めるのではなく、この木骨のきちんとした医学としての歴史的価値を定めて社会に発信することを医学部の研究者がしている、という行為そのものを理解して欲しいと考えた。

D　広島の医学：広島という地域の医学の様相

広島大学医学部医学資料館では、広島大学医学部に関連する資料を多く持っているが、更に、広島県医師会からご寄贈いただいたり、地域の医師や代々医家の家系であった医学部研究者の個人的な資料をお預かりしている。これらは、広島という地域の医学史を研究するうえで大変重要な資料となる。今回は、その所蔵資料群のなかから、「大橋家資料」を、初めて公開させていただいた。

「大橋家資料」とは、代々広島市の仁保地域の医師であった大橋家の資料である。寄贈者は当時のご当主で「大橋医院」を継いで開業していた大橋完造氏であった。完造氏は、父と共に、まず数千冊の江戸時代の医学書を広島大学の図書館に寄贈している。医学資料館は、その一群の刊本を中心とするコレクションとは違う性格の資料を受け取った。

その中心は、言うなれば、「病院経営資料」である。例えば、希少なのは、明治時代以降の病院に来院された患者さんのリストがある。これは年月日と名前、簡単な症状や処方などが書かれている。また、同時期の薬問屋との出納簿もある。これには、いつ、何という薬をいくらで購入したか、また同じ薬がどういう間隔で発注されているか、などのやり取りがわかる。つまり、このことから、近代の広島の病院経営の研究が可能となる。と同時に、仁保地域の地域住民の疾患状況、あるいは広島の経済状況についての研究、つまり人文社会学系の多様な研究にも寄与できる可能性がある。

その他、大橋家が意図して収集した明治時代以降の医学書がある。梅毒に関する書籍が多いことは特徴的であるが、昨今の同病の流行を考えると、また研究の示唆を得られるかもしれない。

なお、来館者より「大橋完造先生に見ていただいていましたので懐かしかった」との感想もいただいた。地域の医学資料をその地域で発信すると、こういう出会いがあるのだと実感した。こうやって広島大学医学部を身近に感じていただければと思う。

また、広島大学の医学部の研究会の事例として、「集談会」の記録も展示した。これは主に所属する学生の研究報告の記録で、その多くは学位を請求する際に行われたものである。昭和から平成のものが断続的に発見できたが、報告要旨や参加者名簿などすべて手書きで、内容についての詳細な質問書もあった。この記録の中から本人のご許可を得て、現在の医学部長、原医研所長、広島県医

師会長のページを掲載させていただいた。筆者個人としては、現在の広島で医療・医学研究を支えている先生方の足跡を示す本物の資料を展示出来て、つまりは広島での広島大学医学部の医学への寄与というもののパースペクティブを見ることができて大変勉強になった。ご本人は驚かれているようだったので、その点は少し申し訳なくも思った。

3．反響など

今回も、コロナ感染流行の合間を縫って、前回同様、完全予約制での展示開催となった。そのため来館者に不安があったが、結果としては、この難しい体制の中で、200 名を大きく超える来館者があった。また、反響をいただいて、展示期間を延長した。

まず端を開いたのは、学長会見で取り上げていただいたことであった。それをきっかけに、中国新聞には大きめに取り上げていただき、また NHK 広島の朝のニュース番組で取り上げていただいた。その他、産経新聞、読売新聞、毎日新聞などにも掲載していただいた。今回、ある社は大久野島を中心に、別の社は大橋家資料をポイントに、というように、各社によってクローズアップされるポイントが違っていることはこれまでにないことで、印象的だった。これは宣伝としてはインパクトが薄くなってしまう場合もあるが、今回は、大テーマとして医学資料館を挙げているので、問題はなかったと考える。

また、来館者で筆者が非常に感動したのは、広島大学関係者の来館が大変多かったことである。原医研の方は多くなかったが、医学部の教室の先生方、学生、職員の皆様などの来館が多く、大変嬉しかった。これはやはり、医学部医学資料館をテーマにしたからだと考える。直接お話しした方からは、「医学部所属として、こういうことを知

りたい、と思っても、今までそういう情報が乏しかった。今回は報道やチラシを見て知り、展示を見て知りたかったことがわかった」というようなことを聞かせていただいた。つまり、自身の所属する組織（研究機関）のことについて、昔のこと、由来、原爆以外のできごとなどを知りたい（少しは把握はしておきたい）というニーズがあるのだ、ただし、そのニーズにこたえるところがあまりない（探しにくい、たどり着かない）という状況もあるのだ、ということではないか、と考える。筆者は、広島の医学史、広大医学部について、というような分野まで手を伸ばすことは力不足で到底できないが、今後はそういったご意見もあるのだということを肝に銘じておきたい。社会との関連を意識する科学者こそが必要な人材である。そのため、こういった科学者の姿勢にできるだけ寄与できる努力を、今後も続けていきたい。

謝辞

本展示においては、広島大学医学部、同医学資料館には、いつもながら、大きなご理解とご支援を頂戴した。特にコロナ流行下であったため、ご心配もひとしおだったと考える。資料の提供については、広島市公文書館、広島大学文書館、広島大学総合博物館にも多大な配慮を頂戴した。また、放射線災害・医科学研究拠点にも引き続きご理解とご協力をいただいた。末尾ながら、深く感謝を申し上げる。